

## 古賀春江資料紹介

——デッサン・スケッチブック・ノート——

杉本秀子

古賀春江(1895—1933)の新資料については、これまで幾度か紹介されてはいる註ものの、その全体が明らかにされたことはなかった。この新資料が石橋美術館の所蔵となったのを機に、今までの調査結果を発表させていただきたいと思う。古賀に関する資料は、東京国立近代美術館が蔵する画稿類やスケッチブックなどをも合せると、大変な数にのぼる。今となっては、彼もまた恵まれた画家の一人であったと言ってよいであろう。が、画家にしてみれば、作品以外にこれだけ多くのものが残されているのは心外のことであるかもしれない。もともと発表するために描いたり綴ったりしたのではないものを公表されるのであるから。しかし、私たちにとっては、画家をより理解する一助となることは間違いない。

新資料を紹介するにあたって、形状によって3つに分類した。半紙大の紙に描かれたもの(これをデッサン類とした)、スケッチブック、ノートである。その他若干の印刷物、水彩画、『梅』(1924年)の版画、書簡、原稿なども含まれるがこれらについては割愛した。

デッサンやスケッチブックの中には、現在図版などでしか見ることでできない作品、行方不明であったり焼失してしまった作品の下絵もあって、それだけでも興味深くながめることができよう。とともに、それら線による描写からは彼のなまの声が聞こえてきしなまいだろうか。彼の内にある漠としたイメージが次第に形を得ていく過程を、それらは露にしているのではないか。でき上がった作品が決して易々と成ったものではないこと、混沌としたものの中から、おそらく手さぐりの状態で一本一本線を重ねていくうちに、少しずつ形が見えてくる、そのような創造の過程をそれらは教えてくれる。最晩年のデッサンやスケッチブックに見られる線の乱れは、確かに病気のしわざかもしれないが、しかしそうとだけは言いきれないものがある。形をつくりあげる苦しみは年々強まっていったとも想像できるのである。ノートやスケッチブックにしばしば書き込まれている題名のメモは、みずからの作品(詩と絵画)に付すためにかなり真剣に考えられた痕跡を残すが、これらもまた、漠としたイメージを言葉で表わそうとする過程、いわば形を与えられる以

前の状態を伝えているように思えてならない。

(註) 新資料について紹介されている文献には次のものがある。

阿部良雄「未発表の古賀春江・青春のスケッチブック」『藝術新潮』28巻6号(1977年6月)

中野嘉一「古賀春江 芸術と病理」『バトグラフィ双書11』(1977年11月 金剛出版)

徳田良仁、島田紀夫、阿部信雄、中田裕子「新資料による古賀春江論」『日本病跡学雑誌』18号(1979年11月)

徳田良仁「古賀春江——夢幻と理知の詩——」『創造と苦悩の軌跡——東と西の世紀末芸術』(1982年2月 金剛出版)

## I デッサン類

枚数は全部で200枚余にのぼる。粗末な半紙に鉛筆書きが大半である。うち、作品の下絵、雑誌(書物)の装丁など、現時点で判明しているものを原則としてここにあげた。これら以外にも谷譲二『もだんでかめろん』表紙のためのデザイン、『新文藝時代』1冊～3冊(1932年1月～3月)表紙原画、『第18回二科展目録』原画(1931年)、『文藝日記』、『女性詩歌』や『若草』など雑誌のためのデザインその他があるが、その一つ一つを記すことはしなかった。また、複数の同図柄のデッサンをもつものもある。その他不明のものの中に、小説などの挿絵と思われるものが多く見られるが、古賀ならではの特徴が発揮されていないのは残念である。佐野年一の回想文(「古賀春江君の思出」『筑後』5-6, 1937年6月)の中に、「何うかして商品価値のある新聞や雑誌の挿絵を描かうとして、報知新聞紙上に挿絵を描いてみた事もあるが、大体失敗に終つてゐる」とあるが、これに該当するものも含まれているかもしれない。

各々のデッサンについて、題名(正確には、完成作品の題名、雑誌名や書名がほとんどである。表紙・挿絵下絵のうちNo. 6, 10, 12, 14, 15, 16は掲載時に付けられた題名をそのまま用いた)、材質・寸法、制作年の順に記している。寸法はいずれも紙の大きさを測定したものであり、画面寸法を( )で示したものもある。補足は※で示した。

### 作品下絵

#### 1. 無題 fig. 1

鉛筆・紙 24.0×33.3cm(16.3×33.3cm) 1929年

#### 2. 美貌なる虚無 fig. 2

鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1930年

#### 3. 彎曲せる眼鏡

鉛筆・紙 29.3×18.9cm 1930年

4. 現実線を切る主智的表情 fig. 3  
鉛筆・紙 25.0×34.2cm 1931年  
※裏面も
  5. 花野原 fig. 4  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1932年
  6. 音のない昼の夢  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm (26.2×20.3cm) 1932年  
※「月夜の鳥」の記入あり
  7. 音のない昼の夢 fig. 5  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm (26.7×20.7cm) 1932年
  8. 散歩  
鉛筆・紙 24.2×33.0cm (20.3×27.0cm)
  9. そこに在る fig. 6  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm (20.0×28.0cm) 1933年
  10. 深海の情景 fig. 7  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
  11. 楽しき饗宴  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm (17.7×24.7cm) 1933年
  12. 文化は人間を妨害する fig. 8  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
  13. 文化は人間を妨害する  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
- 表紙(挿絵)下絵など
1. 片岡鉄兵『女性讃』表紙 fig. 9  
水彩・紙 28.0×26.5cm (19.5×16.5cm) 1930年  
※1930年5月 新潮社刊
  2. 龍胆寺雄『放浪時代』表紙  
水彩・紙 24.5×18.0cm (18.3×12.2cm) 1930年  
※1930年7月 改造社刊
  3. 菊池寛『有憂華』箱絵  
鉛筆・墨・紙 24.5×32.5cm (20.0×14.5cm) 1931年  
※1931年4月 新潮社刊
  4. 菊池寛『有憂華』表紙  
鉛筆・紙 29.0×22.0cm (20.0×12.8cm) 1931年
  5. 竹中久七『餘技』表紙  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年  
※1933年6月 詩之家刊
  6. 檻(『東京バック』表紙)  
水彩・紙 30.0×22.8cm (21.5×19.2cm) 1929年  
※『東京バック』18-11(1929年11月)
  7. 『詩神』表紙のためのデザイン  
鉛筆・水彩・紙 29.3×21.0cm 1930年頃
  8. 『旗魚』表紙 fig. 10  
鉛筆・インク・紙 31.6×22.2cm 1930年  
※『旗魚』6号〜8号(1930年5月, 6月, 12月)
  9. デッサン  
鉛筆・紙 24.2×33.2cm 1931年頃
  10. ロボットも微笑む(『東京バック』裏表紙) fig. 11  
鉛筆・紙 33.5×24.4cm (21.3×19.0cm) 1931年  
※『東京バック』20-6(1931年6月)
  11. 『香蘭』表紙  
墨・水彩・紙 32.5×24.1cm (22.4×15.2cm) 1931年  
※『香蘭』9-7〜9-12(1932年7月〜12月)
  12. 冬(『コードモノクニ』挿絵) fig. 12  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm 1931年  
※『コードモノクニ』11-1(1932年1月)
  13. 『週刊朝日』表紙のためのデザイン  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm (27.0×20.0cm) 1933年頃
  14. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙)  
鉛筆・紙 38.5×26.3cm (28.7×21.8cm) 1933年  
※『週刊朝日』23-5(1933年1月20日)  
画面枠外に以下の記入がある。雑誌社からの注文か。  
「一、顔を出来るだけ美人にして戴き度きこと。／一、  
窓から見える景色を華やかにして戴き度きこと。／一、  
全体の調子を明るく願ひ度きこと。／古賀春江氏」
  15. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙) fig. 13  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm (27.0×20.0cm) 1933年
  16. 街頭の初夏(『週刊朝日』表紙)  
水彩・紙 38.0×21.0cm (26.7×20.2cm) 1933年  
※『週刊朝日』23-26(1933年6月1日)
  17. 模写(『精神病者の絵画』より) fig. 14  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm (11.0×18.0cm)  
※H. Prinzhorn, *Bildnerei der Geisteskranken*  
(Berlin 1922)
  18. 模写(『精神病者の絵画』より)  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm

## II スケッチブック

「大正元年九月十三日夜」の年記のあるものから死の直前のものまで全30冊。大正元年(1912)9月と言えば、古賀が周囲の反対を押し切って上京後、間もない頃である。東京国立近代美術館所蔵の5冊(①1915年4月〜6月, ②1925年〜1927年, ③1927年, ④1930年, ⑤1927年〜1932年)を加えると、彼の作画期全体をほぼ被い尽くすことになる。

各スケッチブックについて、制作年、寸法、年記その他の書き込み、補足説明の順に記している。制作年を推定するに、彼自身によって書き込まれた日付が手がかり

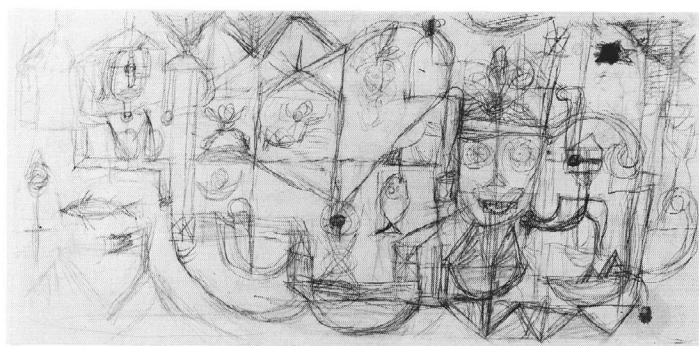


fig. 1 《無題》 1929年

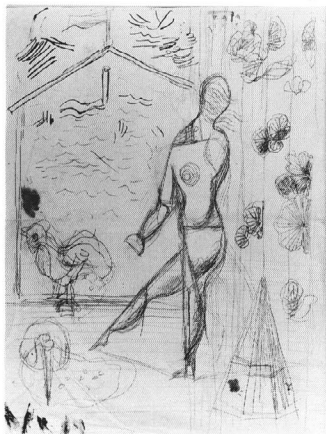


fig. 2 《美貌なる虚無》 1930年

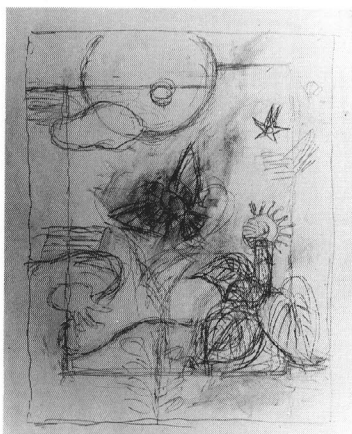


fig. 5 《音のない昼の夢》 1932年



fig. 8 《文化は人間を妨害する》  
1933年



fig. 9 『女性讃』表紙 1930年

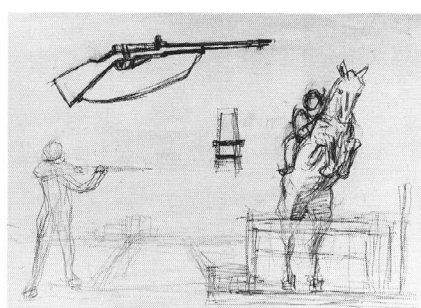


fig. 3 《現実線を切る主智的表情》 1931年

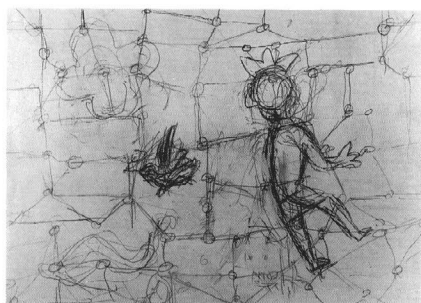


fig. 4 《花野原》 1932年



fig. 6 《そこに在る》 1933年

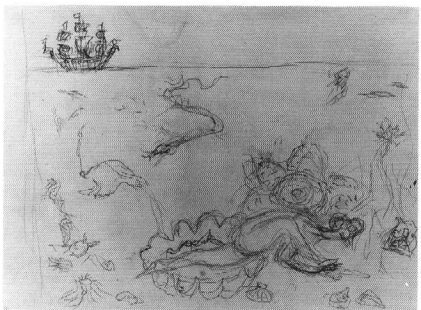


fig. 7 《深海の情景》 1933年

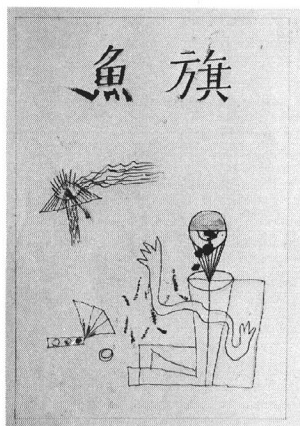


fig. 10 『旗魚』表紙 1930年



fig. 11 《ロボットも微笑む》 1931年

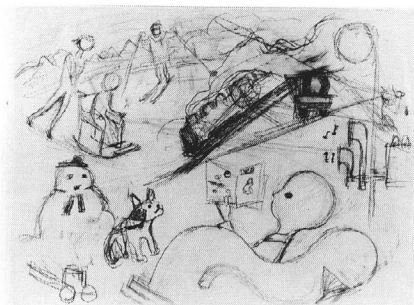


fig. 12 《冬》 1931年



fig. 13 《春のドライブ》 1933年



fig. 15 スケッチブック No. 1  
(1912年9月~10月)より

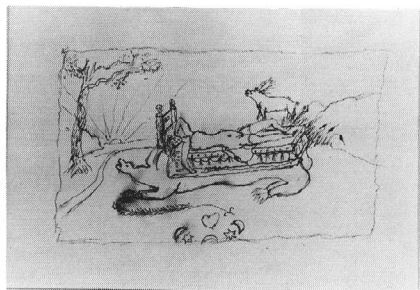


fig. 14 模写



fig. 17 スケッチブック No. 6  
(1913年8月~10月)より



fig. 16 スケッチブック No. 2  
(1912年11月~12月)より



fig. 18 スケッチブック No. 8  
(1914年4月~7月)より



となるが、年記のないものでも、作品の下書きや書名のメモなどから推定可能なものがかかなりある。年記その他の書き込みの項には、年代を明らかにする手がかりとなるもの、彼の心情吐露として興味深く思われる箇所のみ記している。年記とその他の書き込みとは重複するものもあるが、その場合でも分けて記した。一体に彼のスケッチブックには、短歌や詩、日記の形式をとったものなど、文字の部分が多いように思われる。若い頃のものほどその傾向が強いのは当然のことであろうか。友人の藤田謙徳の自殺前後のもの(No. 9)や翌年の長崎滞在中のもの(No. 10)は、ほとんどのページが文字で埋められている。

なお、引用文中、旧漢字はすべて新字に改めた。

1. 1912年9月～10月 fig. 15

18.8×12.5cm

「神楽坂 大正元年九月十三日夜」「泉丘寺にて 夕暮 14th sept 1912」「oct 29 1912」「12th october 1912」「三十日夜の印象 カグラ坂 oct 1912」「1912 sept-meber 23th」「水道端にて 14th sept 1912」「二十四日の印象 1912 sept」「赤児の泣き声 夜 31th october 1912」「神楽坂にて Xと逢ふたる時の印象 25th september 1912」「夕の騒音 犬の声 25th september」「たばこの煙 1912 september 25th」

2. 1912年11月～12月 fig. 16

11.0×18.4cm

「Nobembre Sketch」「大正元年十一月二十五日 昼食場」「帰り度き日 窓より 5日12月元年」  
大正元年(1912)、太平洋画会の妙義旅行に参加した時のものであろう。

3. 1913年4月～5月

11.0×18.5cm

「SKETCH APRIL—13 KOGA」「……四月三十日」「……五月三日」  
「あどけなき事と思へどかゝる／日はたゞ何となく故郷の／恋しき。」  
「灰色の壁よりゴーホは脱け出でて／我耳に来て今日もさゝやく。」  
「近頃製作慾が馬鹿に起る／描いて見れば些とも出来ぬ／今日も植物園で失敗だ／腹が立ってならない／四月三十日」  
「今日も植物園で失敗だ／昨日も月島で失敗だ／五月三日」

4. 1913年6月

11.0×18.5cm

「June—23—1913 YOSHIO」

5. 1913年8月

10.8×18.0cm

「高良山おくの院にて」「八月一日 1913」「……——一三——八・七日」「八月八日の印象」

6. 1913年8月～10月 fig. 17

10.8×18.0cm

「一九一三年の八月の或る日だった。……」「……九月十九日夜」「……——十月廿八日よる——」  
「凡てが孤独だ。」  
「白き猫がヒヨロヒヨロと庭を横切／りぬかくて空ろな今日も暮／れたり。」  
「色々の事をばみんなして見／たい人の命はたつた五十年。」

7. 1913年11月～12月

11.2×18.8cm

「十一月三日の太陽が真赤に／大島の右岸に沈むを望て……」「……十一月七日」「……十一月五日夜」「十二月二十三日 電気館にて」「……——二年十二月二十一日——」「8—30th, 8—31th」  
「浅黄色の霞の底に眠り／たる都よさらばいざや別／れん／Scetch TABINO MAKI」  
「今日描きし絵を見る事が苦し／かりかくて愈乱るゝ心。」

「もう一月で大正二年もお終ひ／だ。過去一年間にした仕事／を振り返って見ると随分下／らない事ばかりである。／つまらない。つまらない。／斯うして一生が終るのだらう／か」

大正2年(1913)11月、古賀は房州布良へのひとり旅に、このスケッチブックを携えて行ったようである。「世を逃れ都を逃れし弱き／児は吸はれて行くか真黒／き海に」といった若者特有の感傷と孤独感を詠んだ歌が多数記されている。

8. 1914年4月～7月 fig. 18

13.9×18.3cm

「三年四月一日」「——四月十一日——」「三年七月廿日」「——七月十八日朝——柳河にて」  
「花が咲く様に描き／草が燃える様に描け。」  
「わがこゝろ何を求むるこの心／暗闇のみち彷徨ひて行く。」  
「Life must be lived,/not thought about./Futurism.」  
「可成強くなったと思ってゐた僕は傲慢／だった。それは極く弱い男の周囲から強／られた自信？に他

ならなかった／自分の見くびってゐた奴にまで散々  
蹴／躑された それを知ってから僕は／自分のなさ  
けなさに泣いた。／自分の内からほんとうに強くな  
れと要／求してゐる もうちぎだ。／ぶっとかる物  
の凡に打衝かる／それは——かたい事だ。」

「螢は自分の行く道は真暗だ／けれども通った道は  
照らされて／ゐる 自分の道もそんな気がする。」

大正3年(1914)7月、松田諦品と柳川へ出かけた際のスケ  
ッチも含まれる。

9. 1914年9月～12月 fig. 19

10.8×18.3cm

「……——九月六日」「……——十二日——九月」「…  
……——十五日——九月」「……十月——八日午前」「…  
……——十一月十九日よる」「……十二月九日よる」「…  
……十二月十日よる」「……十二月二十八日よる」 他

「自分の仕事が曖昧になるのは／自分に信仰がない  
からだ信念／がないからだ／勿論信仰も信念もさ  
うした意／識的のものぢゃないのだけれども／後で  
それは分る事だ 邪念が／あると現在してゐる自分  
の仕事も／つひ不純なものになって終ふだ／らう

そして意識的になってゐる／自分にはよくこんな  
事がある／忘我の境に入る時最も自分の／事をして  
ゐるのである事を知つてゐる (それだけ駄目だ  
と思ふ)／気の弱い自分は知ってゐるから／不純に  
なるのだ 何にも知らなかったらいゝだらうと思ふ  
／そうしたら自分に信仰が出来る／筈だ——九月六  
日」

「何か画きたいと思へど／……何にもかけず／何か  
し度いと思へど／……何にも出来ず／……何にもか  
け／ず何にも出来ない苦しさに／猶更したいと思ふ  
……(以下略)……——十二日——九月」

「芸術は理論ではない 信仰である／恍惚である  
無我境より出る創作／である How to…ではない／  
芸術に径程はない それ自身始／であり終りである  
／故に我々の生活は其れ自身創作／であれば径程と  
いふものはない／何処を切り放して見ても其の部分  
／が全部であらねばならぬ／unity is virnity であ  
らねばならぬ／——二十五日よる」

見返し部分に「古賀よしを」の署名があるとともに、他の部  
分には「春江」の記載も見える。「Kちゃん」という呼びかけ  
で始まる長文は、大正3年(1914)11月初めに猫いらず自殺  
をとげた藤田謙徳への思いを綴ったものである。

10. 1915年1月～3月

11.2×18.5cm

「一九一四<sup>a</sup>——五 はるえ」「……一月廿七日夕」「二

月四日——」「……二月五日——」「……八日夜十二  
時」「……十一日」「……十三日」「……二十三日よる」  
「……——二十八日」「……四日」「十三日夕」「十五日  
朝」「……二十二日よる」 他

「こんな生活／／こんなふやけた生活！／何時まで  
続くだらう——これで若しこのまゝ／／になってゆく  
なら……とても堪えられぬ／俺の肉体と精神の衷真  
からモットモット／力強いものが涵み出なくてはな  
らない／精神的生活！／肉体的生活！／そんなもの  
ではとてもとても駄目だ／精心と肉体とが渾然と溶  
け合つて一塊／／をなして自由にころげ廻る所に始め  
て／新真生活はある／十六日よる」

大正4年(1915)、長崎滞在中のものである。「こんな生活  
！」で始まる文は、当地で親しくなった女性に会いたく  
とも会えない焦りを綴ったものであろう。この直前には  
「……(前文略)……余り手温るい もう事は焦眉の急だ／  
新真生活に入るか……それとも因襲／の俘囚となって朽ち  
るか／二つに一つだ」とも記されている。

11. 1915年7月～12月 fig. 20

10.8×18.5cm

「大正四年七月廿九日より——はるえ」「一九一五  
十月卅一日」「十一月十五日」「十二月七日」

『みづゑ』143号(1917年1月)掲載の《濠のほとり》のスケッ  
チがある。

12. 1917年 fig. 21

15.5×23.5cm

《槍》(1917年)のための習作が含まれる。

13. 1917年8月

15.5×23.8cm

「1917 aug 13 なぶと」「……一九一七・八・二五」

大正6年(1917)夏の波太旅行の際のスケッチが大半を占め  
る。美術雑誌の他、「早文」、「三田文」、「新小説」などのメ  
モがある。

14. 1918年頃

15.5×23.5cm

No. 13と同様、電話機の描写があることから、1917年頃  
のものと推定できる。

15. 1918年頃

10.3×18.0cm

制作年は、書き込まれた書名からの推定である。雑誌『智  
慧』は大正7年(1918)4月に創刊号が出ているのみである。  
その他「ベートベンとミレー」、「タゴールの哲学と文芸」  
「トルストイ十二講」などのメモも見える。



fig. 19  
スケッチブック No. 9  
(1914年9月～12月)より

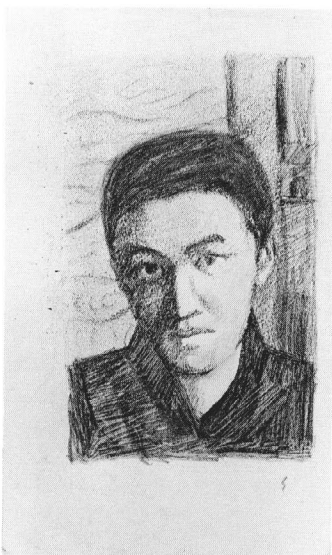


fig. 20  
スケッチブック No. 11  
(1915年7月～12月)より



fig. 21 スケッチブック No. 12 (1917年)より



fig. 22 スケッチブック No. 16 (1922年頃)より

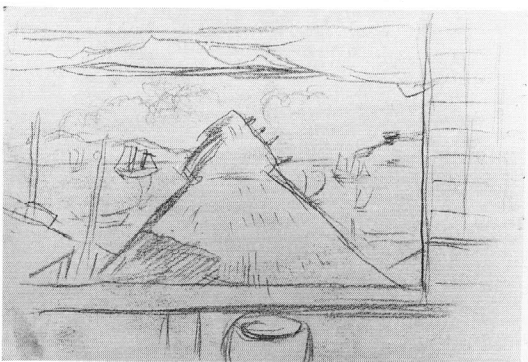


fig. 23 スケッチブック No. 17 (1922年7月～8月)より



fig. 24 スケッチブック No. 17 (1922年7月～8月)より

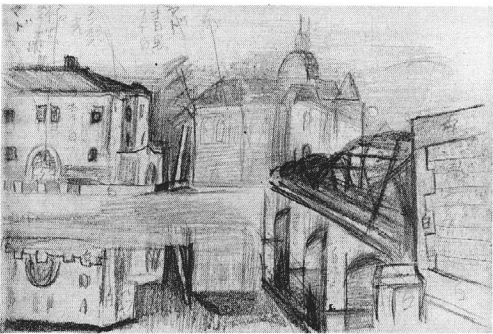


fig. 25 スケッチブック No. 20 (1923年)より

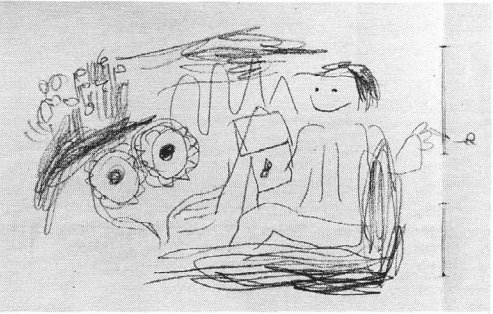


fig. 28 スケッチブック No. 22 (1925年～1926年)より



fig. 29 スケッチブック No. 25 (1931年頃)より



fig. 26 スケッチブック No. 21 (1925年頃)より

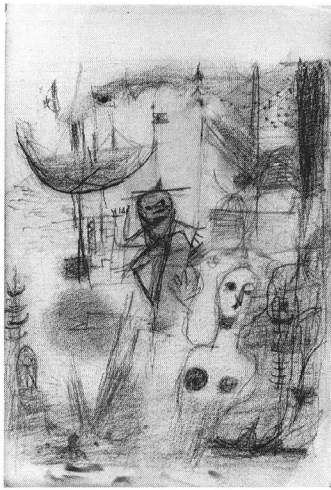


fig. 27 スケッチブック No. 21 (1925年頃)より

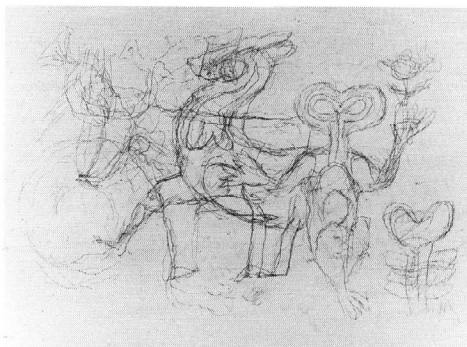


fig. 30 スケッチブック No. 26 (1933年)より



16. 1922年頃 fig. 22  
14.7×22.2cm  
「おーこの果てしない夢想の自覚的／(又は無自覚的)な憧憬の目標よ。」  
《埋葬》(1922年)のためのスケッチと思われるもの、《休息》(1923年)の習作が含まれる。
17. 1922年7月～8月 fig. 23 fig. 24  
13.8×20.7cm  
大正11年(1922)夏、松田諦品と出かけた筑前鐘崎海岸(福岡県宗像郡玄海町)でのスケッチが大半である。《二階より》や《縁側の女》(いずれも1922年作)のスケッチを含む。
18. 1922年8月～11月  
13.5×17.7cm  
「8,28」「8,29」「8,30」「九月二日」「9,2」「十一月三日」「十一月、四日」「五日、十一月」「大正十一年十一月五日」「十一月、五日」「十一月、十一月、十一月」  
大正11年(1922)夏から翌年1月頃にかけての筑前芦屋海岸(福岡県遠賀郡芦屋町)滞在中のものであろう。「肉眼に見える星の研究」、「劇と評論」、「仏蘭西文芸の話」など書名のメモがある。
19. 1923年頃  
15.0×22.0cm  
『みづゑ』222号(1923年8月)掲載の《公園の松の木》のスケッチ、《海辺風景》(1926年の二科展出品作)、「海水浴」のスケッチが含まれる。
20. 1923年 fig. 25  
15.0×22.0cm  
福岡市街のスケッチ、第2回アクション展出品作《風景》のスケッチなど。ピカソの模写(あるいはピカソ風の習作)。「児童芸術叢書第二編」、「アナーキスト列伝」、「美の哲学クロイテエ」、「社会革命史論」などのメモもある。
21. 1925年頃 fig. 26 fig. 27  
18.0×27.0cm  
「形を確かにして／色を種々取り／合せ相等の塗り厚と／濃淡を確強に区別す／寒色に気をつけよ ローシエンナ等で妨ぐ／コバルト系を善用せよ、筆解を柔剛／混ぜ織り込むべし 形象を抜き出させ」  
行方不明の《肩掛けの女》(1925年)の習作、雑誌『手帖』1ー5(1927年7月)掲載の《素描》など。
22. 1925年～1926年 fig. 28  
14.0×20.5cm  
『中央美術』11-8(1925年8月)掲載の《花》、『中央美術』12-8(1926年8月)掲載の《スケッチ》、《赤い風景》(1926年)のスケッチが含まれる。「昇」、「新ロシア美術大観」、「動物詩集 アポリネール 堀口大学」などのメモも見える。
23. 1927年  
28.0×24.5cm  
《収穫》(1927年)の習作。
24. 1928年頃～1932年頃  
14.0×22.0cm  
《山ノ手風景》(1928年)の部分スケッチ、クレー《Feather Plant》(1919年)の鉛筆模写、《孔雀》(1932年)の習作と思われるものなど。書名の書き込みも年代推定の手がかりとなる。蔵原惟人著『プロレタリアートと文化の問題』(鉄塔書院)は、昭和7年(1932)6月の刊行である。
25. 1931年頃 fig. 29  
14.5×22.0cm  
菊池寛『有憂華』の装丁に関するメモ、「文芸評論 小林秀雄」、「ソビエツト芸術の全展望 茂森唯士」、「マルクス主義芸術学研究」、「観念形態論 三木清」、「マックス・ジャコブ詩法 堀口大学訳」など書名のメモも見える。
26. 1933年 fig. 30  
14.5×22.0cm  
「一つの定義(或は命題以前)／古典的な風景／提言は可／答案として一応は可／夕暮れに廻る星／誕生／思念の仮死時間の／すっかり何んでも持って居る／暗闇に眼覚めてゐる者／凡てのものを持ってゐる／挿話の一片／鳩の歌／一色の定理」  
「一、深海の風景／一、サーカス一景／人間主義は文化を妨害／する／□□□□」  
作品名のメモらしきものが記されている。《鳩の唄》、《抽象》(いずれも1933年)のスケッチ、水上・湯檜曾でのスケッチも含まれる。
27. 未詳  
10.5×18.0cm  
好江夫人の顔のスケッチが含まれる。
28. 未詳  
15.5×23.5cm  
「ハウプトマン傑作集」、「秋色足跡」、「黎明」、「リラの花」、「虐げられし人々」、「屈辱」、「散文詩ツルゲーネフ」などのメモがある。
29. 未詳  
14.1×22.0cm
30. 1922年頃？  
11.5×18.3cm  
「先端を十文字に万そう膏でくゝる事／ゴム管を短かく切って貰ふ事／濃をよく出して貰ふ事／先生に

してもらふ事」

「一人だ——。／わがために自殺したものゝ描かれたパンの種である。／僅かな金に□を得たいばかりに」

ピカソ、ローランサンの模写。制作年は書名のメモを手がかりとした。佐藤惣之助『華やかな散歩』、萩原朔太郎『新しき欲情』などの書き込みがある。

### Ⅲ ノート

全12冊のうち6冊(No. 2～No. 7)は雑誌などに発表した文の下書きで埋められている。現在判明しているものについては、草稿として、題名と発表された雑誌名などをあげた。ノートには題名の記入はほとんどないが、便宜的に発表時の題名を用いた。不明のものについては、その他の項にあげ、全文あるいは部分的に転写したものもある。未発表の文もあるかもしれないが、おそらくは何らかの雑誌などに発表されているにちがいない。なかには古賀以外の手になる文章も含まれていよう。写しであることを恐れず転写したものもある。各記事に関して補足があれば※で示した。

引用文中、旧漢字はすべて新字に改めた。

#### 1. 1917年頃

〔書き込み〕

「古賀はるえ」庚申 TAISHOROKUNEN ROKU-GATSUGO」

宗教大学で学んでいた頃の聴講ノートであろう。各宗要義、心理学、浄土宗史、国史などの講義メモがある。「庚申」とは大学の仲間たちで発刊を企てた雑誌の名前であろうと推測できる。その表紙のデザインを古賀が担当したのか。同じ大正6年(1917)頃のスケッチブック(No. 12)にも「庚申」という文字と図案が描き込まれている。

#### 2. 1923年頃

〔草稿〕

「仏蘭西現代美術展覧会を観る」『みづゑ』219(1923年5月)

聖母子像などのスケッチ多数。

#### 3. 1923年

二科福岡展開催準備に関するメモ。その他スケッチ多数。

#### 4. 1923年頃～1926年

〔草稿〕

「日暮里駅」『中央美術』11-3(1925年3月)

「丘」『マロニエ』2-3(1926年3月)

「喜ばしき船出——『新しき時代の精神に送る』の著者へ——」『みづゑ』229(1924年3月)

「春展寸感」『アトリエ』2-4(1925年4月)

「美術家家勢調査」『中央美術』11-6(1925年6月)

「思ひつく事など」『美之國』2-10(1926年10月)

〔その他〕

・創作。

※途中から好江夫人の筆跡に変わる。

・「模倣芸術と対象性に就いて」

・「美文大辞典」

※以上2文は好江夫人の筆跡。

・自作『涅槃』寄贈感謝状に対する返事。

#### 5. 1923年～1930年

〔草稿〕

「新東京の美観問題」『みづゑ』225(1923年11月)

「銀ブラ、浅草観音」『中央美術』12-2(1926年2月)

「造型第一回作品展覧会を観る」『みづゑ』255(1926年5月)

「橋本八百二氏・堀田喜代治氏洋画展感」『中央美術』12-7(1926年7月)

「春素描」『中央美術』12-8(1926年8月)

「短詩六つ——坂、花園で、港、七月、関係、或る夜更」『みづゑ』258(1926年8月)

「野原」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「造型第二回展感」『みづゑ』260(1926年10月)

「日本水彩画会展覧会感」『中央美術』13-3(1927年3月)

「至上主義者の弁」『アルト』7(1928年11月)

「鬼夜の話」『中央美術』15-2(1929年2月)

「あんなに泣いてはいけな」『中央美術』15-1(1929年1月)

「銀色の審美学——海辺風景、少年の願望、点景」『みづゑ』289(1929年3月)

「青空に描く素描」『中央美術』15-5(1929年5月)

「円筒形の画像——宇宙の爪、古き窓、晚餐、直線の如きもの、点景」『みづゑ』299(1929年10月)

※ノートには「円錐形の画像」と記されている。

「パントマイム」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「無題」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「精神のとある一瞬に見るもの或は遠景の拒絶」  
「一人の神話」『水中の針』いずれも『古賀春江』(1934年 春鳥会)所収

「ぼんやりした話」『婦人サロン』1-4(1929年12月)

「とりとめもなく」『文藝春秋』7-12(1929年12月)

「空間の整理」「感傷」「アポロンの花」いずれも『古賀春江』所収

「道德的な一つの門」「朦朧とした眼鏡」『セレクト』

1-4(1930年4月)

「腕力の讃」『香蘭』8-3(1930年3月)

「満開の花の咲いた列車」『花』『鳩の指』いずれも『古賀春江』所収

「超現実主義私感」『アトリエ』7-1(1930年1月)

「弱気」『アトリエ』7-1(1930年1月)

〔その他〕

- ・図画教育に関するアンケートへの答え。

※「造型第一回作品展覧会を観る」草稿と「橋本・堀田洋画展観」草稿の間に記されている。大正15年(1926)頃のものか。「正確なる客観描写」を推奨している。

- ・「心経中枢 彼女は決して躊躇くことをしない」、「彼は磨かれた素足の隻脚で立つ」で始まる詩2篇。  
※「あんなに泣いてはいけな」草稿のすぐあとにつづく。昭和4年(1929)頃のものか。

- ・「我々が普通現実と称んでゐる所／の夢の迷信から我々は一時も早く／脱却しなければならぬ」、「自転車は地上を走り飛行機は／空を飛ぶ」で始まる2文。

※「無題」(詩)草稿のあとにつづく。いずれも自身の絵画観を述べたものである。「……画は／画それ自身が一つの自然である……(中略)……テーブルの上に建／つてゐる家も自然である……」(後者から抜粋)という文章などは『素朴な月夜』(1929年)の解説文として読むことも可能であろう。

- ・「影のない風景」と題された詩。

※前2文のあとにつづく。

## 6. 1930年～1932年

〔草稿〕

「奉讃展記」『アトリエ』7-5(1930年5月)

「黎明の脚」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「現代絵画の動向に就いて」『クロツキー』6(1930年9月)

「我国の新しい絵画と画壇に就いて」『婦人サロン』2-10(1930年10月)

「『窓外の化粧』に就て」『みづゑ』307(1930年9月)

「極めて鮮明なる文明の縞——歓喜と欲望の定規、游泳する腕の眼鏡、爪」『みづゑ』307(1930年9月)

「一九三〇年の印象・ABC」『近代生活』2-12(1930年12月)

「寸言、不平不満」『アトリエ』7-12(1930年12月)

「新興リアリズムに就て」『ヒューザン』11(1932年2月)

「広告風船」『週刊朝日』19-17(1931年4月5日)

「街の天使」『週刊朝日』19-21(1930年5月3日)

第一書房刊『古賀春江画集』(1931年)解題詩(全31篇)

「洋傘」『週刊朝日』20-15(1931年10月1日)

「或日の日記——月夜、素描、季節の魅惑」『みづゑ』322(1931年12月)

「写真と空想 或は具象と抽象」『ヒューザン』12(1932年4月)

「製作」『古賀春江』所収

※紙片に記されている。

「海の夏祭り」『美之國』8-8(1932年8月)

「展覧会前景」『美術新論』7-9(1932年9月)

「顔」『美術新論』7-10(1932年10月)

「秋」『週刊朝日』22-17(1932年10月)

「印象に残る元旦」『週刊朝日』23-2(1933年1月2日)

「早春随想」『文學時代』4-4(1932年4月)

〔その他〕

- ・詩の題名のメモ。「游泳する腕の眼鏡／昇る魚／延びゆく曲線／移動する円筒／熱情ある定規／金□の歓喜と欲望／爪／祝福さるゝ鶯／鮮明なる運動の波濤——縞／極めて一般的なる文明の天才——縞」

※「『窓外の化粧』に就て」のあとにつづく。

- ・「我々の現実の中には空想もあれば理想もあり／夢もあれば実行もある それ等をたゞ／忠実に描写するといふことに何の意／義もあるものではない／芸術はそれ等を統一し方向づけ芸／術価値を構成するにある／普通に所謂の技術として見ても写／実といふことは現実の客観的表現を／目的とするといはれてゐるけれども／厳密に解釈すれば至って困難な／ことで我々の視覚と／いはれるものがどの程度まで客観的真／実を捉へ得るかといふことさへ問題／となる……(中略)……凡ての存在が変つてゆく／ものをある一定の固定的画／面に写すといふことそのことが既に不可能／ではないか」

※「新興リアリズムに就て」草稿のすぐあとに記されているもの。あるいはそのつづきか。

- ・「リアリズムの芸術とは何か」で始まる画論。

※「広告風船」のあとに記されている。

- ・昭和3年(1928)の長崎滞在中のこと(随筆)。

※「街の天使」のあとにつづく。昭和6年(1931)頃のものか。《生花》制作時の思い出も記されている。

- ・間所一郎作品頒布会推薦文。

- ・機械と美術との関係について。

※紙片に好江夫人の筆跡で記されている。

- ・作品題名のメモ。「現実線を切る主智的表情／燦めく生理／浮き上る鋭角／時間的事象の弁明(包まれたる懷疑)／霧のかゝつた機械的因果律(物理

・化学)／の表情／仮設の現実線を越える馬／人形の夢と科学の一系列／掩はれたる時間の弁明を／粉碎するもの／勤勉なる——時間の直線——眼『秩序(歴史)ある時間の直線』／記憶は驚げる／感傷の生理に就いて／叡知——情熱の現実線を越える馬／側面の線を整理せよ／感覚を透視する／秩序の一経程に就いて(或は／一つの方法論として)／朧ろな夢の生理に就いて」

- ・「広い窓縁に腰かけて娘は時計ネヂを 捲い／てゐる」という語句で始まる詩。

- ・荒井一郎作品頒布会推薦文。

※以上3篇が「洋傘」のあとにつづく。

- ・自作解説(《朧ろなる時間の直線》について?)「我々の時間的な現実の認識を・その素材／を客観の形象を借りて表したもので／朧げな一つの観念形態を成す／ポエジーであると思ひます それを即物的な技法を借りて／表した心算です／裸体の女はこの場合／海の魚族と一緒に個々の物それ自身として／は此場合有機的に溶け合／ったのから合ふことはなく各個は／各々独立した存在です或一つ／の時間の概念的(線の)記録と云へませう」

- ・衣装図案について(自作図案解説)。

※以上2篇は「季節の魅惑」のあとにつづく。

- ・奥田とし子作品頒布会推薦文。

- ・「六月になると凡ての人の感覚が鋭く 清澄／な透明体になり世界の果までも感得／されて澀刺とした精神が躍動／する」という語句で始まる随筆。

- ・「美人といふ定義が主観的に／決定されるものだとするなら 私は未だ／美人といふ人に遇った記憶がありません」という語句で始まる美人論。

※以上の3つの文は「写真と空想」草稿のあとにつづく。

- ・自作解説(《孔雀》について)。「この画は普通所謂花鳥図とも云ふ／可きもので別に意味のあるものではあ／りません 古来より美しいとされて来／た孔雀と花との視覚的な／美しさを描いたまでのものです／少し写実的に細密に描きたかった／のでそのために少しばかり苦勞しました／方々に孔雀を見て歩きました／が差し当り日比谷公園のがこの時／一番美しく羽を開くのでそれを／主にして毎日日比谷に通ひました……(以下略)……」

※「展覧会前景」草稿と「顔」草稿の間に記されている。

- ・「私は日常の殆ど全時間が考へることに費されてゐる 人が聞いたら馬鹿馬鹿しいといふだらう／やうなことばかり考へてゐる しかしこれは仕方が／ない 何にも具体的に表現されないのによそ

／から見たらのんきな風に見えるが当然と思ふ／庭先の大きな銀杏の木の風貌 天候との関係／朝と夕暮とに於けるその木の表情 雀と／屋根の瓦

犬達の生活と新聞の文芸欄／いろいろな広告の記事 大工さんのカンナと／金槌の音 向ふ家の少\*女君の金切声／これ等がみんなあるものがある／それが一つに／つながってゐるのである それをよく理解しやう／と考へる 空間とは時間の墮落したもので／あるといふ ベルグソン カントの純粹認識と／マルクスの唯物弁証法 湯殿でパチャパチャ／言はしてゐる女中さん 沙漠の月／このあるものゝつながり それをよく知る事／これと私とのつながり／私の日常生活はそれ等の抽象と具像との感／覚的認識を土台として一つの観念形態と／しての構成をすることです／こゝにいふことになって来ると私の芸術／論を持ち出さねばならないがそれはとても大変／だからこゝでは出来ない／翫味せよ(翫味なる言葉を)／究めよ」

- ・作品題名のメモ。「認識の試練 答はゼロ／答弁は一応諾／朗らかな署名／微笑する風景／出題は一応諾／花と昆虫 悪の日誌」

※「印象に残る元旦」草稿と「早春随想」草稿の間には以上の随筆とメモ以外にもいくつかの文が記されている。

## 7. 1933年

〔草稿〕

「病床にて『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「動物園の白熊」『みづゑ』343(1933年 9月)

「《サーカスの景》解説」『みづゑ』343(1933年 9月)

「早春随想」『文學時代』4-4(1932年 4月)

※別紙に記入

〔その他〕

- ・「転形期の思想」と題された芸術論。「現代は芸術の衰微時代だ 凡ての芸術が古代より／時代を追ふて／平凡に時代時代に受け次げられて其時代時代の／花として続いて行つた……超現実主義も今日最早それ自／身活動を尽して次\*時の生産の力を失滅し／た 昨日までの芸術の美は最早今日の美では／なく芸術ではなくなった……芸術一盤／が新しい／生れ来る世界にその先端に立って如何なる／方向と方法を持って行くか——それが目下急／務の目題(使命)である／殊に絵画に於てその二問題は大きい／今日の芸術と計\*されてゐる絵画は／昨日までの使命を持ってゐたもので・今日以後の役目を果たすものではない／現実にある芸術それは夢のやうな儚かない美／しか持たない



「昨日の夢しか過ぎない存在である／芸術はその存在としては本質的に社会変化の／歴史の／反映に相違はない。その現実存在として自然現／実の物質には単なる美しいものゝ物質的形<sup>3</sup>式的視／覚的存在に過ぎないが故にそれは感情的感覚／的であり従来の自然芸術にある／真の芸術は文化的反映は<sup>3</sup>／認識的の観念的構成であり／だから真の作品は理知主義であり主情主義で／はない／色彩形態線は数学的素材の科学的——具体的数学的であり／表現は記号的になるべきである／その素材の構成に就いて感覚的より観念的に。」

- 「我々は微力な□□だ／これからその全力を以て古いゆるゆる脚した／自我主義を全て蹴<sup>3</sup>して今まで／あった凡ての芸術精神を一蹴して新しい世界／の文化／の尖端に立って—□の力を尽さうと思ふ／若い芽立の生々とした同志達よ集れ。」
- 「芸術文化の前衛として／此の新しい時代に対して其動行を(芸術界と一盤社会)明示しその意義／を意味あらしめるやうと決意し四人が同盟し／て立つた 諸賢の御示教と御賛成を／願ひます」
- 「芸術文化の尖端的な前衛存在として／自然的芸術論より観念的芸術論とその現実／的在在のために方法論を究明するもの／病幣、感覚的創作の實踐的否定より観念的創作／の實踐的肯<sup>3</sup>へ 芸術的存在の現在／滅亡してもその本質在在は滅亡しない／没落したとハ言ハないが今我々には今迄<sup>3</sup>の超現實主義／より脱<sup>3</sup>け出し一步前進する／今日までの超現實主義の功績は非常に顯著もの／であったが／今や新しい純粹なものが生証が必要だ／必然的人本主義 整算され」

※「転形期の思想」以下一連のメモは、昭和8年(1933)、東郷青児、阿部金剛、峯岸義一とアヴァンギャルド研究所創設を企図した際のものであろう。

- 渡辺修三、北園克衛などの詩の写しその他。

8. 未詳

「養治兄」という呼びかけで始まる手紙文。

9. 未詳

平戸廉吉「ローランサンのお伽噺の芸術」、木村莊八「近代絵画の道」、佐藤惣之助「草虫寸詞」その他の写しよりなる。

10. 未詳

夢二画集を筆墨で模写したものが大半。

11. 住所録

その他不明のもの1冊